



TITLE:

業績目録

AUTHOR(S):

CITATION:

業績目録. 京都大學結核研究所年報 1951, 2: 26-26

ISSUE DATE:

1951-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/50849>

RIGHT:

【第2部】 理學的診療學部 (主任 教授 岩井孝義)

【業績目録】

- 1) 笹瀬博次：結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究
第1編 結核性十二指腸狭窄症……………26
- 2) 笹瀬博次：結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究
第2編 血行性結核の臨床統計的考察……………31
- 3) 笹瀬博次：結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究
第3編 結核血行轉移の年齢別統計研究……………34
- 4) 笹瀬博次：結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究
第4編 対臓器に於ける血行轉移結核竈の分布……………36
- 5) 笹瀬博次：結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究
第5編 急死者に見られる臓器内の結核性孤立性血行轉移巣に関する病理学的研究……………38

結核血行轉移に関する「レ」線学的並びに病理学的研究

第1編 結核性十二指腸狭窄症

笹 瀬 博 次

緒 言

腸結核と言へば廻盲部が最も好発部位であり、次で廻腸或は上行結腸、更に空腸横行結腸の順となるのである。然るに十二指腸のみに來て意外の感を懷くことがある。頻度は胃結核より更に少く1例報告の域にあり、岩永氏は176例の腸結核中唯1例下水平部の狭窄を経験して居られる位であり、而も高位狭窄を起して來るので栄養障碍が速かであり、それだけ結核症を重篤ならしむる惧あり、且一般に腸結核は肺結核の末期に來るに反し、本症は割に肺に著変なしに來り、之さへ適當に処置すれば好轉歸を取り得るのであり、其發生機轉に就ても興味があると考へたので検討を加へることとした。

症 例

第1例 山〇し〇 20歳農、家族で結核で死んだり、罹つたりしたものはない。2年前全身倦怠、上腹部の不快感があり、胃疾患として治療を受け2ヶ月餘でよくなつたことがある。今度は入院する2ヶ月前から何等誘因なしに嘔氣、上腹部の不快感を感じ、其後数日して急に嘔吐をなし直ちに医治を受けたがよくなりず、嘔吐は食後2時間位して惡心に次で起り、其前に食べた全部が出る位に思ふ。1ヶ月半前からは毎食後吐く。疼痛は全くないけれども常に上腹部に膨満感不快感あり近頃は嘔吐を恐れ1日1回少量の食事を取ることにしている。嘔吐は攝取した食物の種類には無関係であり吐物には血液や珈琲残渣様物を交えず、嘔吐後は極めて心持よく感ず。食欲はあるが嘔吐を恐れて